

# 保育系学科の短期大学生における スポーツボランティアの認識と参加意欲

## Awareness and Participation consciousness of Sports Volunteers of junior college students in the department of childcare

中村学園大学 流通科学部

音 成 陽 子

### I 緒言

文部省（現・文部科学省）は2000年にスポーツボランティアを「地域におけるスポーツクラブやスポーツ団体において、報酬を目的としないで、クラブ・団体の運営や指導活動を日常的に支えたり、また、国際競技大会や地域スポーツ大会などにおいて、専門的能力や時間などを進んで提供し、大会の運営を支える人のこと」と定義している。

保育系学科の学生は、教育・福祉の場での活躍が期待され、子どものみならず保護者や地域、関係施設と良好な関係を持つことが求められる。幼稚園指導要領解説および保育所保育指針解説における領域「人間関係」において、「将来のボランティア精神の基盤となる人の役に立つ喜びを幼児期に経験させるためには、このような自分のできる手伝いをする事などにより、他者の役に立っているという満足感を得られるようにすることが大切である。」という記載がみられる。このことは、幼稚園教諭・保育士となる学生にとって、ボランティア活動の体験は重要といえる。

これまでの研究においては、保育系学生のボランティア活動については、地域ボランティア、災害支援ボランティア、福祉ボランティアなどの先行研究はみられる。多田ら（2019）は付属幼稚園における授業の空きコマボランティア体験は、保育者養成カリキュラムとともに保育者

になる自己意識の形成、つまり、職能意識の形成に影響を与えることを示した。八尋（2019）は災害ボランティアによって当事者意識を持つこと、価値観の確認（自己覚知）、メタサポート、コミュニケーション力、支援の継続の必要性など、今後の保育現場での自己の鍛錬に繋がることを報告している。川口ら（2013）は学生がボランティア活動を通して、パフォーマンス技術の改善の機会を得るとともに、子どもだけでなく保護者に寄り添う姿勢を学んだと述べている。

保育士資格においては、教養科目としての体育、つまり、生涯スポーツは講義科目と実技科目ともに免許必修となっている。さらに、幼稚園教諭資格においては、教科に関する科目として一般教養の体育、つまり、生涯スポーツが免許必修となっている。生涯スポーツは「するスポーツ」「みるスポーツ」「ささえるスポーツ」から構成される。そこで、本稿ではスポーツボランティアはスポーツ大会やスポーツイベント、クラブの運営・サポート、スポーツ実践者に対するサポートを行うことと定義した。「ささえるスポーツ」は、スポーツボランティアだけでなく、審判やコーチ、スポンサーなどを含むと定義した。

先行研究をみても、スポーツボランティアは学生がスポーツイベント・大会する経験や生涯スポーツとの関わりについての調査が行わ

れていた。一方、教育・福祉の場で活躍する保育系学生を調査としたスポーツボランティアの研究は多くはない。音成（2017）はスポーツボランティアを生涯スポーツにおける新しいスポーツ経験の場であり、スポーツを通じての地域貢献・社会貢献や価値観の変容の場と述べている。そこで、本研究は保育系学生がスポーツボランティアに対して、どのような認識を持っているかを明らかにすることに意義がある。さらに、保育系学生のスポーツボランティア活動の参加促進の方策について検討するものである。

## II 方法

- ・対象：短期大学部幼児保育学科の学生でデータに欠損のなかった95名とした。  
なお、対象者は全員、女子学生だった。
- ・調査時期：2019年1月10日「保育内容健康」の授業中に実施した。
- ・調査方法：Web調査「LimeSurvey」を使用し、回収した。
- ・調査項目：基本的属性、ボランティアの認識（32項目）、参加の意志など（10項目）、スポーツボランティアについて（12項目）とした。調査項目はClaryら（1998）のVFI尺度、日本の状況にあうように改変した谷田（2001）の項目などを参考に作成した。
- ・統計処理：SPSS ver.22を使用し、因子分析（因子抽出法：最尤法／回転法：プロマックス法）、決定木（交差検証法5分割）を行った。なお、有意水準は $p < 0.05$ とした。
- ・倫理的配慮：調査開始にあたり、「個人は特定されないこと」「すべてのデータは数値化されること」「回答が評価に影響されないこと」などを口頭で説明した。さらに、Web調査の設問の前文にも記載した。そして、了承した者が回答した。

## III 結果

### 1. ボランティアの参加意思

図1にボランティアの参加意思を示した。ボランティアに「参加したい」は82名（86.3%）だった。詳細に尋ねてみると、「友だち・知り合いと一緒に参加したい」は92名（96.8%）、「自分のために参加したい」は85名（89.5%）と増加がみられた。ただし、「一人でも参加したい」は32名（33.7%）だった。また、「頼まれたら参加したい」は82名（86.3%）だった。

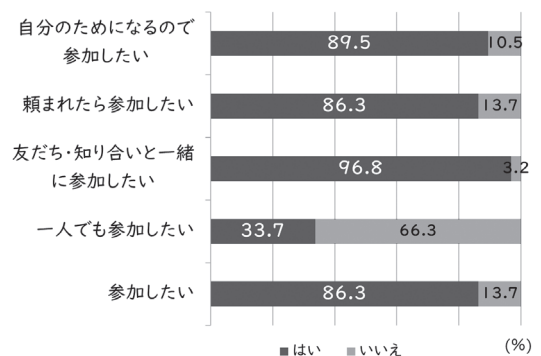


図1. ボランティアの参加意思

### 2. ボランティアとして参加したい活動内容

図2にボランティアとして参加したい活動内容を示した。回答は多い順に「イベント」89名（93.7%）、「災害支援」76名（80.0%）、「地域活動」66名（69.5%）、「福祉支援」63名（66.3%）、「スポーツ関係」58名（61.1%）という結果だった。このことは、お祭りや音楽祭といった一見、楽しそうなイベントへの参加は高い興味関心を示しているといえる。また、近年の自然災害の状況から、災害支援への興味関心も高かった。将来、幼稚園教諭や保育士になる予定の者が多いが、福祉支援への関心はイベントや災害支援と同様の興味関心を示していなかった。

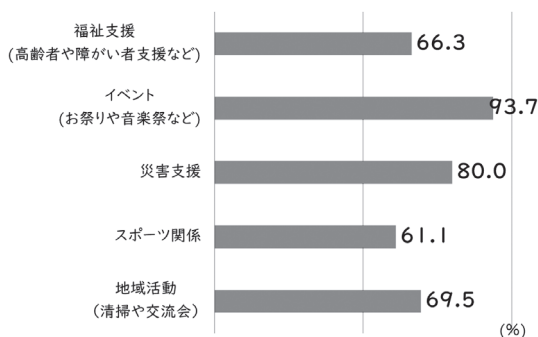


図2. 参加したい活動内容 (複数回答)

### 3. 生涯スポーツの構成要素の認識とスポーツボランティアという用語の認識

図3に生涯スポーツとボランティアの認識を示した。生涯スポーツの認知度は「するスポーツ」68名(71.6%)が最も高い割合を示した。次いで、「みるスポーツ」62名(65.3%)、「ささえるスポーツ」25名(26.3%)だった。そして、「スポーツボランティア」の用語の認知度は26名(27.4%)だった。スポーツボランティアの経験は「地域大会」25名(26.3%)、「国内大会」8名(8.4%)、「国際大会」1名(1.1%)だった。スポーツボランティアに参加するために必要なことは「活動内容を知っている」77名(81.1%)、「競技を知っている」68名(71.6%)、「大会を知っている」64名(67.4%)だった。スポーツボランティアをすることと、スポーツとの関係では「スポーツを知ることができる」86名(90.5%)、「スポーツをやってみたくなる」68名(71.6%)だった。生涯スポーツには「する」「みる」「ささえる」という関わり方がある。ボランティアは「ささえるスポーツ」にあたる。しかし、スポーツボランティアの認知度は低いことがわかった。

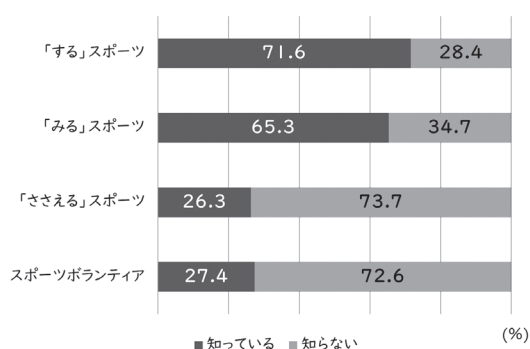


図3. 生涯スポーツとスポーツボランティアの認識

### 4. スポーツボランティアをするために必要なこと

図4にスポーツボランティアをするために必要なことを示した。その結果、最も多かったのは「活動内容を知っている」77名(81.1%)、次いで「競技を知っている」68名(71.6%)、「大会を知っている」64名(67.4%)の順だった。スポーツボランティアに参加するために、競技、大会、活動内容のいずれも知っている必要があるという割合が高かった。スポーツボランティアの活動は、受付など誰もができる役割もある。しかし、スポーツ大会となると審判や大会運営といった専門性や経験が必要だと認識していることがわかった。

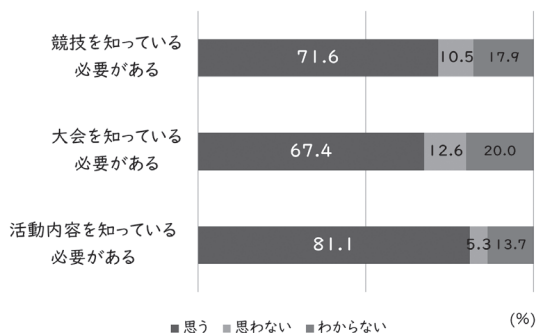


図4. スポーツボランティアをするために必要なこと

### 5. ボランティアの認識

ボランティアの認識において、「思う」割合

が高かったのは「社会活動である (93名、97.9%)」、「いろいろな人と付き合っていく方法が学べる (93名、97.9%)」だった。そして、「物事についての新しい考え方が得られる (92名、96.8%)」、「できることがあると気づく (90名、94.7%)」、「他人のために行く (89名、93.7%)」、「人に感謝される (86名、90.5%)」と続いた。一方、「思う」割合が低かったのは「無駄である (3名、3.2%)」、「自分とは無関係である (4名、4.2%)」、「自主実習はボランティアと同じである (11名、11.6%)」などであった。

31項目のボランティアの認識に対して、因子分析を行いその結果を表1に示す。因子抽出法は最尤法を用い、回転法はカイザーの正規化を伴うプロマックス法を用いた。その結果、主成分として4因子において、カイ2乗値=400.663、df=374、有意確率=0.164であり適合した。第1因子は9項目で構成されており、「必要とされていると実感できる」、「人に感謝される」、「自分自身の大切さや重要性に気づく」、「自分の長所を見つけることができる」など、自己認識において肯定的な項目が高い負荷量を示していた。そこで、「自己肯定感・自己有能感」とした。第2因子は9項目で構成されており、「負担がある」、「きつい・つらい」など、活動に際して自己の負担や損失に関する項目が高い負荷量を示していた。そこで、「利他的行動」とした。第3因子は7項目で構成されており、「私になりたい仕事や職業に役立つ」、「自分が取り組んでいることを深めることができる」など、将来の職業やメリットや今の自分の状況への利点に関する項目が高い負荷量を示した。そこで、「キャリア・利己的行動」とした。第4因子は7項目で構成されており、「誰でもできる」、「楽しんでできる」など、ボランティアに取り組む姿勢や他者との関わりに関する項目が高い負荷量

を示した。そこで、「社会性」とした。各因子の安定性については、信頼性係数クロンバクの $\alpha$ 値を用いて算出した。その結果、第1因子 $\alpha=0.74$ 、第2因子 $\alpha=0.76$ 、第3因子 $\alpha=0.74$ 、第4因子 $\alpha=0.75$ であり、妥当な値である $\alpha=0.8$ 以上ではなかったが、適合度の観点から十分な値と判断した。

図5はボランティアの認識(決定木)を示した。決定木は交差検証において5分割でR2乗値=0.40だった。「できることがあると気づく(思う)」と意思決定することに始まり、次いで、「楽しむこと(思う・思わない)」と「楽しむこと(わからない)」に分岐した。次いで「楽しむこと(思う・思わない)」は「好ましい人間である実感(思う・思わない)」と「好ましい人間である実感(わからない)」に分岐した。このことから、多数の者におけるボランティアの認識はできることがあるという自己有能感、活動への好意、そして、他者からの好評価であるといえる。一方、「できることがあると気づく(思う)」と自己有能感を認識しながらも、「楽しむこと(わからない)」の分岐の先には「負担がある(思う)」、さらに、「自主的に行く(思う・思わない)」というボランティアに消極的となりうる認識もみられた。つまり、ボランティアへの参加意欲として「できることがある」と気づき、活動を「楽しめる」、そして、自分自身は「好ましいと実感できる」という認識が必要といえる。

さらに、スポーツボランティアを行うことは、「スポーツを知ることができる(86名、90.55%)」、「スポーツをやってみたくなる(68名、71.6%)」という結果だった。つまり、スポーツボランティアは競技種目への親和性を高めると認識していることがわかった。

表 1. ボランティアの認識 (構造)

	因子			
	1	2	3	4
<b>必要とされていると実感できる</b>	.801	.052	.105	-.330
人に感謝される	.624	.063	.114	-.047
自分自身の大切さや重要性に気づく	.614	-.025	.059	-.026
自分の長所をみつけることができる	.614	-.051	.011	.250
好ましい人間であると実感できる	.575	.199	.048	.275
物事についての新しい考え方が得られる	.432	-.173	.105	.259
できることがあると気づく	.396	-.154	.128	.069
責任がある	.369	.095	-.104	.260
自分のために行う	.228	.212	.038	.160
<b>負担がある</b>	-.197	.671	-.492	.153
きつい・つらい	-.001	.511	.123	.124
時間をとられる	-.078	.489	-.075	-.051
情報がない	.179	.457	.049	.308
お金がかかる	.098	.436	.409	.209
自主実習はボランティアと同じである	.021	.406	.051	.005
社会活動である	.091	.295	.025	-.186
断ることができる	-.188	.260	.188	.014
補助的活動である	.184	.208	.107	.205
<b>私になりたい仕事や職業に役立つ</b>	.063	.255	.567	-.069
自分が取り組んでいることを深めることができる	.143	.147	.522	-.036
自主的に行う	.138	-.091	.473	.249
自尊心(自分を大切にする気持ち)を高めてくれる	.409	-.095	.443	.183
自分とは無関係である	.035	-.004	.365	-.046
無駄である	-.033	-.009	.280	-.093
レジャーやレクリエーションである	.036	-.018	.269	.199
<b>誰でもできる</b>	-.024	.101	-.030	.477
楽しんでできる	.126	-.099	.199	.464
継続して行う	.291	.162	.124	.335
他人のために行う	.217	.167	-.139	.300
新たな出会いの場となる	.031	-.018	-.215	.229
いろいろな人と付き合っていく方法が学べる	-.064	.116	-.045	.117
無報酬で行う	.077	.014	-.046	.108

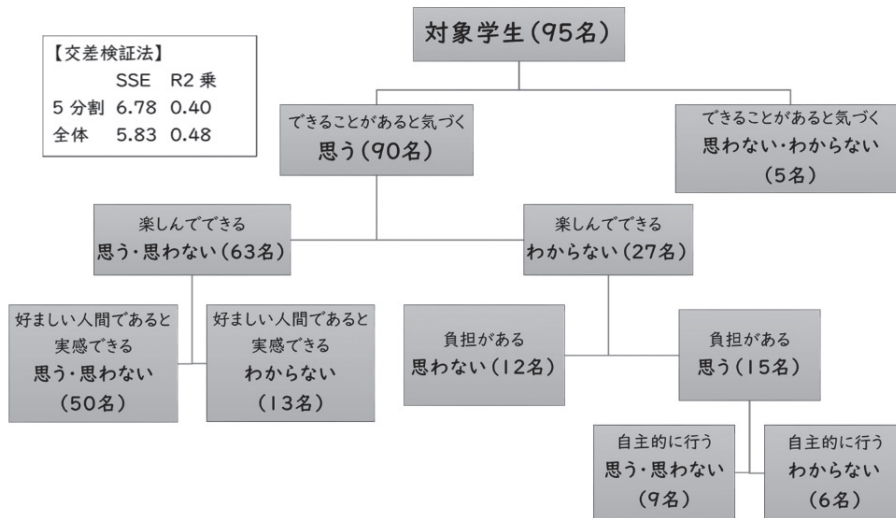


図 5. ボランティアの認識 (決定木)

#### IV. 考察

本研究の対象となった保育系学科の学生は、ボランティアは一人よりも友人・知人と一緒に、頼まれてたならば参加したいという傾向がみられた。このことは、ボランティアの自主性・主体性、積極性という点での活動意識は高いとはいえない。本研究は参加すると仮定した場合に「一人でも参加したい」(33.7%) という結果であり、伊多波ら (2016) は実際に参加した際の動機において「誰かのために自分からすすんで参加した」(17%) という結果であった。つまり、実際に活動するとなると、本研究の対象者の自主的・主体的な参加率は低下することが考えられる。

依頼によるボランティア参加動機は、松本 (1999)、田引 (2008)、内藤 (2009)、元嶋ら (2016) などにもみることができる。山口 (2004, p.5-6) によれば、従来、日本におけるボランティアが地域や職場からの依頼や団体の一員として参加する外発的動機が主流だったという。元嶋ら (2016) はスポーツイベントの運営に際して大学教員が体育会系部活動所属学生を中心にス

ポーツボランティアへの従事を依頼したと述べている。音成 (2019) は、スポーツ大会のボランティアの高校生は学校へ大会運営への協力が要請され、学校から高校生へ呼びかけがあり、それに応じて参加していたと報告している。したがって、スポーツボランティアの「依頼」は学校関係の活動動機となりやすいといえる。さらに、ボランティアの参加決定では、一緒に活動してくれる友人・知人の存在が大きいことは、「依頼」されることとあわせて参加促進の要因となりえると推察される。

そこで、ボランティアの認識をみると4因子からは保育系学科の学生において人との出会いや自己有能感を向上させることは、将来の職業にプラスに働くと認識していることが示唆された。このことはClary (1998) らのVFI (volunteer functions inventory) モデルにおける強化機能であると考えられる。保育系学科の学生という視点でみると、新谷 (2017) の対人関係を基本とする専門職の規範意識が芽生えという学びにつながるといえる。それは、多田ら (2019) がボランティア活動によって保育者になる自己

意識の形成、職の意識の形成に影響を与えると述べていることからわかる。

先に述べたように、自主的・主体的、積極的でない者にとって必要だと「依頼」されて参加することは、友人や知人と一緒に参加することはボランティアの参加動機として十分であるといえる。専門性を必要としない、誰もできる活動内容を持つスポーツボランティアは、ボランティアのきっかけとなり得ると考えられる。スポーツボランティアは競技団体から学校への依頼も多く、体育系サークル以外の学生に参加の機会はあるといえる。近年では、サービス・ラーニングやアクティブ・ラーニングの一つにボランティアも行われており、学生にとっては、単位取得を目的として活動してみることが可能となっている。この場合、ボランティア経験や意欲に差があるだろう。そこで、スポーツ大会の主催者が留意するポイントが「2017年度調査報告書 スポーツボランティアに関する調査」(笹川スポーツ財団, 2018b, p.30) に記されているものを以下に示す。その内容は、世代や経験の有無を考慮した配置、継続して活動してもらうための仕組みなどとなっている。

## V. 今後の課題

保育系学科の学生には保育者となる自己意識・職能意識の形成も必要である。さらに、保育士としてのパフォーマンスの向上も図らなければならない。つまり、スポーツボランティアの参加だけでは、現場で必要とされる教育・保育の技術や技能の向上は十分といえない。したがって、大学のカリキュラムとともに、ボランティアのプログラムを組むことが重要となる。本研究ではボランティアに関する大学のカリキュラムや活動プログラムに言及するまでは至っていないことが課題といえる。

次に、スポーツボランティアの認識において、各項目に「思う」「思わない」以外の「わからない」と回答した者が少なからず存在した。この「わからない」という回答が、ボランティアの理解が不足しているのか、ボランティアに無関心であるのかということの検討を行っていない。参加してみたいものとして、イベントのボランティア9割、災害ボランティア8割を超えている。ボランティア経験の詳細な調査に加え、これらのボランティアの認識との比較が必要といえる。

さらに、ボランティアの依頼によって参加す

表2. 大規模イベントのボランティアが大会後も活躍するために、大会主催者が留意するポイント

<p>1. ボランティアの選考・配置</p> <p>1) 年代や過去のボランティア経験を参考に、大会後のレガシー創造を考慮して選考する</p> <p>2) 多世代の協働と経験者による未経験者の育成が活動を通じて実現できるよう配置する</p> <p>2. ボランティアの養成・教育</p> <p>ボランティアの社会的意義を参加者に理解してもらう</p> <p>3. ボランティアと関わるスタッフへの啓発</p> <p>ボランティアが単なる無償の労働力でないことを、関係する有給スタッフ等に理解してもらう</p> <p>4. 活動終了後</p> <p>大会終了後、意欲があるボランティアに活動機会を提供する体制を整備する</p> <p>1) 活躍の場を継続的に提供するためのイベント、プログラムの開発：異分野連携と主催者啓発</p> <p>2) ボランティア登録制度の整備：人材の固定化を防ぐ仕組みづくり</p>
--

出典) 笹川スポーツ財団 (2018)、「2017年度調査報告書 スポーツボランティアに関する調査」、p.30 <http://www.ssf.or.jp/report/category6/tabid/1707/Default.aspx>

ることが、活動者の自主性・主体性によるものなのか、半ば強制ではないかという疑問が残る。参加のきっかけとしてのスポーツボランティアを提示したが、実際に活動し、その後の継続性については検討ができていない。つまり、活動前の調査・検討に留まっており、活動後の学生の変容についての検討が必要である。

#### 【引用・参考文献】

- Clary, E. G., Snyder, M., Ridge, R. D., Copeland, J., Stukas, A. A., Haugen, J., & Miene, P. (1998). Understanding and assessing the motivations of volunteers: A functional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1516-1530.
- 伊多波美奈・首藤敏元 (2016) 大学生におけるボランティア経験とボランティア活動に期待する成果、自己効力感、及び協調性との関連<教育科学>. 埼玉大学紀要教育学部. 65 (2). p.35-46
- 川口潤子・龍田建次 (2013) 地域ボランティア活動における保育学生の意識変化. 愛知学泉大学・短期大学紀要. 48. p.45-49
- 厚生労働省 (2018) 保育所保育指針解説 p.235 <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf>
- 松本耕二 (1999) スポーツ・ボランティアの類型化に関する研究. 山口県立大学社会福祉学部紀要. 5. p.11-19
- 文部省 (2000) スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議：スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究報告書. p.4
- 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説. p.181 [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/09/19/1384661\\_3\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/09/19/1384661_3_3.pdf)
- 元嶋菜美香・宮良俊行 (2016) スポーツボランティア活動が体育会系部活動所属学生の気分状態に与える心理的影響 —ボランティアスタッフの満足感に着目して—. 長崎国際大学論叢. 16. p.13-22
- 内藤正和 (2009) 地域のスポーツイベントにおけるボランティア活動に関する研究—依頼型のボランティアに着目して—. 愛知学院大学心身科学部紀要第. 5. p.7-15
- 音成陽子 (2017) 大学生のスポーツ・ボランティアのあり方. 流通科学研究. 17 (1). p.25-38
- 音成陽子 (2019) 高等学校の部活動におけるスポーツボランティアについて. 流通科学研究. 19 (1). p.103-112
- 笹川スポーツ財団編 (2018a) 子ども・青少年のスポーツライフ・データ2017. 笹川スポーツ財団. p.72
- 笹川スポーツ財団 (2018b) 2017年度調査報告書 スポーツボランティアに関する調査. p.4 <http://www.ssf.or.jp/report/category6/tabid/1707/Default.aspx>
- 笹川スポーツ財団 (2018b) 2017年度調査報告書 スポーツボランティアに関する調査. p.30 <http://www.ssf.or.jp/report/category6/tabid/1707/Default.aspx>
- 笹川スポーツ財団 (2018c) スポーツボランティアに関する調査2019. p.19 [http://www.ssf.or.jp/Portals/0/resources/research/report/pdf/report\\_volunteer2019\\_all.pdf](http://www.ssf.or.jp/Portals/0/resources/research/report/pdf/report_volunteer2019_all.pdf)
- 新谷龍太郎 (2017) 保育職志望学生におけるボランティア体験の意義. 保育研究. 47. p.34-43
- 多田琴子・高松邦彦 (2019) 保育職を目指す学生の継続的ボランティア体験と職能形成. 幼年児童教育研究第. 31. p.45-55
- 谷田勇人 (2001) 福祉ボランティア活動をする大学生の動機の分析 社会福祉学. 41. p.83-94
- 田引俊和 (2008) 障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機に関する研究. 医療福祉研究. 4. p.98-107
- 八尋茂樹 (2019) 短期大学保育学生の災害支援ボランティアからの学び. 新見公立大学紀要. 39. p.125-130
- 山口泰雄 (2004) スポーツ・ボランティアへの招待—新しいスポーツ文化の可能性. 世界思想社. p.5-6